

国際商都アントウェルペンの興隆

——繁栄の契機をめぐって——

スヘルデ河畔の都市アントウェルペンは、一五世紀九〇年代から半世紀余にわたってヨーロッパ国際商業の結節地として空前の繁栄を享受した。

この都市を、「輝やける都市」(urbs praecleara)と絶賛した時人ルドヴィコ・グイッチャルディニは、この都市には様々な遠来の人々が訪れ、身分も言葉も違う者達が互いに入りまじって往来し、その盛んな様は驚異であったと述べている。⁽¹⁾ フランソワ一世は、宿敵カルル五世の手中にあるこの都市を、「世界で最も商業の盛んで高貴なる都市」と羨望した。⁽²⁾

この都市を結び目とした商業網は、ヨーロッパの枠を大きく越えるものでもあった。早くも一五世紀において

中 沢 勝 三

ポルトガルのアフリカ植民地産物の主要な販路となり、一六世紀に入るとアジア産香料(特に胡椒)の北部ヨーロッパ向け最大の市場となった。こうした外来商人の活躍はいうまでもないとして、地元商人も、北はスウェーデン・ロシアから、南はアゾレス諸島を遠く越えて、新生ブラジルにまでその活動の足跡を辿ることができる。⁽³⁾ アントウェルペンは、一面で「世界」市場の性格を併せ持ちつつ、ヨーロッパ商業の頂点の座を半世紀余にわたって保持した。その特色は、就中、「以前にも以後においても……(中略)一つの港がこの地における程大きな意味を持ち……世界的な性格を示したことはなかった」(ピレンヌ)というその国際的な性格である。⁽⁴⁾ 一六世紀

中頃アルプス・ピレネー以北で比肩しうる人口(一〇万余)を持つのはバリだけだったという。⁽⁵⁾ 繁栄はこの都市を北方ルネサンスの都とし、ここにアントウエルペンの「黄金時代」が訪れたのである。

ところでアントウエルペンの繁栄とは、そもそも何を以ていい、どのような歴史的情勢の中で出来し、如何なる契機によって招来されたものなのであろうか。本稿では、特に一五世紀末の二〇数年間に時期を絞り、國際政治・經濟の動きの中で外来商人がアントウエルペンに定着してゆく過程を浮き彫りにしてみたい。というのは、この時期における外来商人の動向こそ、ブリュッセル(ブリュージュ)を最終的に國際商都の座から突き落とす、アントウエルペンをそれへと押し上げたためのであったからである。

- (一) L. Guicciardini, *Descrittione di tutti i Paesi Bassi*. Anvers 1567. 中のナンテウエルペンの項の冒頭語句。この語は一橋大学付属図書館メジャー文庫蔵の一六三四年版に依る。 *Belgicae descriptio generalis*. Amsterdam, p. 129. 又 R. H. Tawney and F. Power ed., *Tudor Economic Documents*. London 1924, III (コト TED) 略記。以下他の雜誌各等の引用に當つてはこれに準じた記

号を用いる) 所収のものは一五八二年のフランス語抄訳である。

- (二) E. Coornaert, *Les Français et le commerce international à Anvers*, Paris 1963, I, p. 96.
- (三) クラマン家 De Schetz の活動を全頭にかゝる P. Jeannin, 'Les relations économiques des villes de la Baltique avec Anvers au XVI^e siècle,' *Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*, 43 (1956), pp. 325-332. トリスノドのプラザ V. Vazquez de Prada, *Letres marchandes d'Anvers*, Paris Introduction, 1960, pp. 184-189.
- (四) 「世界市場」marché mondial (本稿の「國際商都」の意味内容は、ナンテウエルペンに從つて、商品取引の唯一市場への集中、および一定の地理的範囲内での商業調整機能を果たす特定市場としてのものを指す。J. A. Van Houtte, 'Bruges et Anvers, marchés «nationaux» ou «internationaux», du XV^e au XVI^e siècle,' (I) (この彼の著作の引用には記号を用ふる) *Revue du Nord* RN, 34 (1952), p. 91.
- (五) H. Pirenne, *Histoire de Belgique*, 3^{ed.}, Bruxelles, 1922, II, pp. 218-219.
- (六) J. A. Van Houtte, 'Anvers,' (II) *Città, Mercanti, Dottrine nell'economia europea dal IV^o al XVIII^o secolo* (Biblioteca della Rivista Economia e Storia, n^o 11),

Milam, 1964, p. 309.

アントウエルベンの繁栄については、既にグイッチャルディーニ自身によって洞察に満ちた考察がなされていた。彼が、この都市の取引と商売は外国商人 (mercator ali-enigena) の手にあり、「この(都市の)引用者」主要な基礎は商品によって成り立って」いたと述べ、さらに彼らの来往のきっかけとして大市の開設とポルトガル香料取引の開始を挙げていることは、以下の考察にとって示唆的である。

つまり、外国商人相互間に営なまれた取引こそこの都市の繁栄をもたらしたものであるという見方は、今日においても広く認められたテーゼなのである。シャント、エーレンベルク、ピレンヌらによって前世紀末から切り開かれた研究もこの点を強調した。シャントは、一五世紀中葉のイギリス毛織物商人団体であるマーチャント・アドヴェンチャラーズの定着を以て、アントウエルベンの繁栄の「偉大さの礎石」とした。⁽⁴⁾ エーレンベルクはポルトガルの香料取引により、大きな意義を与えている。⁽⁵⁾ ま

たピレンヌは、繁栄の契機として、イギリス毛織物商人の定着、それに続く南ドイツ人の来訪、さらに新しい支配者であるハブスブルク家に対してのこの都市の一貫した忠誠を挙げているのである。⁽⁶⁾

とはいえ個別的研究の進展は今世紀の二〇年代をまたねばならない。一九二五年のゴリの南欧商人居留地の研究⁽⁷⁾は、特定の商人群の活動に焦点をあてたものとして、以後の研究の一つのバターンを生み出し、この頃より研究と史料の刊行が急速に増加するのである。⁽⁸⁾ こうした背景のもとでその後の諸多の研究に決定的な影響を及ぼす論文が一九四〇年に出現した。これこそファン・ハウテの「アントウエルベン国際大市場の生誕」⁽⁹⁾ という論文であって、今日に至るもここに示された彼の主張に替るべき統一的な把握はみることができないのである。そこで以下において、彼の主張を本稿の観点に即してみることにしたい。⁽¹⁰⁾

その眼目は、「アントウエルベンの繁栄にとってイギリス毛織物取引が決定的な重要性を持っていた」⁽¹¹⁾ という点にある。が、彼の主張の独自性は、イギリス毛織物取引を要とし、これに引き寄せられ結びつけられていく他

の經濟的諸契機の連鎖的かつ総合的な展望にこそあるといえよう。

一四世紀にライン地方を後背地として毛皮や葡萄酒の有力な市場となっていたこの都市は、一五世紀に入って飛躍的な發展を遂げていった。それは、前世紀來進展しつつあった羊毛輸出イギリスの毛織物輸出への轉換と、他面での、その側庄を受けたフランドル毛織物工業の不振・停滞⁽¹²⁾という、ヨーロッパ經濟の一大構造變化の只中で招來されたものであった。つまりフランドルは一五世紀三〇年代以降はつきりとイギリス毛織物を締め出すに至ったが、これとは対照的に、アントウェルペンはケルン商人を中心としたイギリス毛織物の買手を迎え入れ、こうした経緯のもとでマーチャント・アドヴェンチュラーズは四〇年代中頃に至って、この都市を大陸での活動の本拠地としたのである。

さらにこの都市は、同じ頃勃興しつつあった南ドイツの鉱山業とケルンの商人を介して結びつき、一五世紀三〇年代以降その鉱産物の販路(逆にイギリス毛織物が南下する)となつてゆく⁽¹³⁾。この動きは、アフリカ西岸を探索し、原地との取引において殊に銅を必要としていたポ

ルトガルをこの地に引きつけることとなつた⁽¹⁴⁾。のちの一六世紀の事態について彼が用いる表現「アントウェルペンの世界交易の構造に大きな役割を演じた三つの支柱(drie pijlers)⁽¹⁵⁾」、すなわちイギリス、南ドイツ、ポルトガル各商人のこの地との結びつきは、こうして早くも一五世紀中に形成されつつあったとさえいえるのである。

こうした動静は、世紀末に至って際立った進展をみせてゆくことになる。南ドイツ商人のこの地への直接進出とポルトガルの東インド航路の開設がそれであり、これら両者は一四九五年頃銀・銅対香料の直接取引を始めた⁽¹⁶⁾。他方のイギリス毛織物商人も、これより先きの一四七四年にはハンザ商業圏への進出に失敗しており、大陸への窓口をこの都市一つに限られていった。この毛織物は未仕上のままこの地に持ち込まれてこの市の染色仕上工業によって加工されて内陸へと向つた⁽¹⁷⁾。

以上要約したアントウェルペンの繁栄の經濟的契機を析出したファン・ハウテの捉え方は、つい近年に至るまで本格的に批判されることのない通説となつて⁽¹⁸⁾いる。私は、彼の主張を、とりわけ本質的な契機を探り出した点についても、また総合的な把握の仕方そのものについて

も、大筋において高く評価したい。しかしながらこの都市の最終的な興隆期を問題にするとき、私は彼の説に解き切れないもどかしさを感じざるをえない。このことの内容は以下の行論のうちに明らかにしていくが、私は、彼にあって軽視された側面、すなわちネーデルラントにおけるハブスブルク家優位へと推移していく国際政治の果たした役割⁽¹⁹⁾、特にはこの只中でのブリュッヘン・アントウエルペン両者の争克と姿勢の違い、直截に言えば、アントウエルペンのハブスブルク家との結びつきこそ、ブリュッヘンの運命を最終的に決し、アントウエルペンを国際商都へと一挙に押し上げた契機と考えるのである。

- (1) Guicciardini, *op. cit.*, p. 225; *TEED*, III, p. 157.
 (2) このアントウエルペンの市場にいつく少く触れておく。それは大市 (Jaarmarkt, foire, Messe) であって春と秋に開かれ、商人が商品を持参して卸売取引を行なうものである。この大市に対立する市場が「取引所」(Beurs, bourse, Börse) であって、商品が持ち込まれることなく取引決済されるのである。同市に本格的な取引所が設立されるのは一五三一年のことである。なおアントウエルペンの大市開設は一四世紀二〇年代に溯り、聖露降臨祭(五月)と聖バフオン祭(十月)から各六週間催されたが、これは

- 繁栄の推移と共に次第に守られなくなっていた。そしてこの両大市は当市の北約三〇キロにあるスルゲン・オブ・ノーム Bergen-op-Zoom の春秋二つの大市と各々定期的に接続し、北ブラバントの地に国際的取引の広大な場が持たれたのである。以上 J. Gillissen, 'La notion de la foire à la lumière de la méthode comparative,' *Recueils de la Société Jean Bodin*, V, 1953: la Foire (FOIRE), pp. 324-327; M. Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 5te Aufl., hrsg. v. J. Winckelmann, Tübingen 1972, S. 91. 邦訳富永健一「経済行為の社会学的基础範疇」『世界の名著50「マキーン」』東京、一九七五年、四三一頁。; E. Coornaert, 'Les bourses d'Anvers aux XV^e et XVI^e siècles,' *Revue historique*, 217 (1957); J. A. Van Houtte, 'Les foires dans la Belgique ancienne,' (III) FOIRE; T. S. Bindoff, 'The greatness of Antwerp,' *The New Cambridge Modern History* (NCMH), II, 1958.
 (3) Guicciardini, *op. cit.*, pp. 163-164; *TEED*, III, pp. 150-151.
 (4) G. Schanz, *Englische Handelspolitik gegen Ende des Mittelalters*, Leipzig 1881, I, S. 8.
 (5) R. Ehrenberg, *Das Zeitalter der Fugger*, Jena 1896, II, S. 3.
 (6) Pirenne, *op. cit.*, III, p. 268.
 (7) J. A. Goris, *Étude sur les colonies marchandes mé-*

ridionales (Portugais, Espagnols, Italiens) à Anvers de 1488 à 1567, Louvain, 1925.

(9) なかむのトリヤノス通史トホリヤ J. Denucé による史料の刊行が異彩を放つ。F. Prims, *Geschiedenis van Antwerpen*, 28 dln. Antwerpen, 1927—1949.

(10) J. A. Van Houtte, 'La genèse du grand marché international d'Anvers à la fin du Moyen Age,' (IV) *Revue belge de Philologie et d'Histoire* RB, 19 (1940).

(11) I—IV 以外に参照した文献は次の通り。'Handel en Verkeer,' (V) *Allgemeine Geschiedenis der Nederlanden* AGN, red. Van Houtte, J. Romein e. a. Utrecht, 1949—58, 12 dln. IV, 1952.; 'Anvers aux XV^e et XVI^e siècles. Expansion et apogée' (VI) *Annales, Economies. Sociétés. Civilisations*. AEFSC, 16 (1961).; 'Declin et survivance d'Anvers' (VII) *Studi in Onore di A. Fanfani SOAF*, V, Milano 1962.; 'The rise and decline of the market of Bruges,' (VIII) *Economic History Review*, 2nd. ser., 19 (1966).; *Die Beziehungen zwischen Köln und den Niederlanden vom Hochmittelalter bis zum Beginn des Industriealters*, Köln 1969 (IX). (11) V, blz. 164.; VI, p. 258. (12) 彼はブリュッヘをワラン、羊毛織物の市場と規定し、ここでは世界市場の機能が果たされず、よって「国際」市場ではないと論じた。ズウィンの水路が砂で埋まったのは

トリヤノス衰退の本質的な原因ではなからうと云ふ事。特註 I, IV, VIII.

(13) この点文献により異同がみられる。IX, S. 28. 註のなかへを一四三四年の公の銀の過大評価に求めてくる点、後に触れるが(註注 80) II, p. 306. VIII, p. 43. 彼が示して来る如く、一四六五年以降のトリヤノスの方は 45°.

(14) この点で当初の来航地をアントワールと云ふ場合 IX, S. 19. とトリヤノスと云ふ場合 II, p. 19. がある、異同がみられる。

(15) V, blz. 166.; VI, p. 260.

(16) V, blz. 159.; VI, p. 253. 1515—15世紀の香料なトリヤノスとトリカ産のものとある。

(17) VI, p. 258.

(18) W. Brulez, 'Brugge en Antwerpen in de 15de en 16de eeuw: een tegenstelling' *Tijdschrift voor Geschiedenis*, 83 (1970). 茶話 'Bruges and Antwerp in the 15th and 16th centuries: an Antithesis?' *Acta Historiae Neerlandica*, The Hague, VI, 1973. この論文の注 14、商業都市としての両都市の浮沈を「ノマン・ノマン」の通説は、くに過大に評価すべきでないという点にある。尤も、彼も一五六九年の百分の一税(家屋・土地・商品所有に對する税)徴収比で、アントワールとウェルメンがブリュッヘの四倍を越えるものであったという差は認めている。blz. 19. なお

栗原福也「世界市場アムステルダム成立とオランダ経済の特質」『社会経済史学』三七卷一九七一年、三五—三六頁。なお、ファン・デル・ウェーも、本稿の観点に照らすと、新鮮味がな。H. Van der Wee, *The Growth of the Antwerp Market and European Economy, I—III*, The Hague, 1963.

(6) 彼はこの契機を重視した。V, blz. 158—159.; VI, pp. 251—252. なお三注23を参照。

二

ファン・ハウテのいう三つの支柱は、どのような経過を以てアントウェルペンに集まり、定着していったのであろうか。(1) さらに——私はこの過程こそ国際商都への道程であって、その後のアントウェルペンの繁栄の枠組を形造ったと考えるのだが——一五世紀末の政治的動乱の中で、ブリュッヘンに本拠を持つイタリアやハンザの商人が、どのような去就を示し、アントウェルペンへ移って行かねばならなかったのか。以下、二で前者を、三で後者を扱おうことにしたい。

〔イギリス毛織物商人〕 これはロンドンに本拠を持った白地広巾(未仕上)毛織物の輸出商団体であるマ

ーチャント・アドヴェンチャラーズそのものと考えてよい。そしてロンドン・アントウェルペン間の毛織物取引の持つ意義の重大さについては、既にイギリス史研究の側からわが国においても広く認められてきたところである。(2)

アントウェルペンにアドヴェンチャラーズの活動が目立ち始めるのは一五世紀二〇年代の頃からである。(3) この頃にはイギリスは毛織物輸出国への転換を遂げつつあったのである。その大陸への進出、羊毛輸出に対する高率関税、及びカレールの羊毛ステープルでの価格の高騰などが、独自の毛織物工業に立脚するブリュッヘンなどフランドル諸都市の反発を招いた。(4) フランドル諸都市はフィリップス善良公 Philips de Goede にイギリス毛織物の輸入禁止を行なうよう働きかけ、これは三度にわたる禁制となつて実現された。(5) これは逆にイギリス毛織物を受け入れることによつて地歩を固めつつあったアントウェルペンは、アドヴェンチャラーズを迎え入れ、こうした動きは一四四六年、同市の同市におけるアドヴェンチャラーズに対する特権賦与となつて結実した。(6)

六〇年代に入つてほぼ同じ頃海を挟んだ両側で通貨政

策の大転換がなされた。一四六四年のイギリスの大幅なポンド切り下げと、翌年のネーデルラントの銀重視への移行に伴なった平価切り下げがそれである⁽⁸⁾。前者は毛織物輸出に対して内乱や市場の狭隘化(ポルドーの喪失、ハンザ商業圏からのイギリス商人の撤退)を相殺させる程の基盤を与え、後者はルーヴァンなど地元繊維産業を活況へと向かわせた⁽⁹⁾。アントウェルペンの毛織物仕上げ業が隆盛に赴くのもこの頃からであり、これこそロンドンとのリンクを物語るものなのである⁽¹⁰⁾。そして一四七三年以後ロンドン一港が全英毛織物輸出の過半を担当してゆくのである⁽¹¹⁾。

だが、全て順調に進んだわけではない。対立は主にネーデルラント側の関税率をめぐって、最終的には一六世紀初頭迄続く。イギリスは輸出禁制とアドヴェンチャラーズ⁽¹²⁾の撤退を武器としてこれに対したが、みてきたようにこの地に販路を絞られていた彼らは、結局この都市に戻らざるをえなかった⁽¹³⁾。つまり両者の結び付きはそれ程までに実質的な重みを持つに至っていた。輸出額の推移がこの動静を如実に映し出している。輸出額は一四八八年以降五・二万クロス以上を保ったが、九〇年代におい

ては五―六万クロスの間伸び悩んだのである。そして、一四九九年五月のヘンリー七世・フィリップス端麗公(九四年より親政)間の合意によって両者の利害が調整され、二年前のマグヌス・インテルクルスス(大条約)の実質が備えられ⁽¹⁴⁾、その後急激な取引高の伸張をみることになる⁽¹⁵⁾。

なお、ここでみた毛織物取引は単なる通過交易ではなかった。イギリス輸出毛織物の大部分を占める白地広巾織は、高度な技術を有する同市の加工業を経なければ販売することができなかった⁽¹⁶⁾。毛織物はここで仕上げられて主に内陸のケルン、フランクフルト(a. M.)へ、そこからさらに北上・南下し、遠くは北イタリアからレヴァントへ送られていった⁽¹⁷⁾。

〔南ドイツ商人〕 当初ケルンなどライン地方の商人を介して、特には前項でみた一四六五年の平価切り下げ以後、ネーデルラントへ銀、銅、バルヘント織、香料などを送付してヨーロッパ経済の前面に雄姿をあらわしつつあった南ドイツ商人も、一四八〇年頃から直接アントウェルペンに進出していった⁽¹⁸⁾。顕著な動きは一四八九年以後のフッガーの登場を俟たねばならない。この年

「小鹿」(有名な富豪ヤーコブの従兄)のルーカス・フッガーが同市においてドイツ国王マクシミリアンに軍資金を提供している事実は、後段との関係で重要である。⁽²⁰⁾所で「百合」のフッガーは遅くも一四九四年にはアントウエルペンに定着した。⁽²¹⁾

こうしたフッガーの動きは、八〇年代のティロール鉱山業への進出、及びヨハン・トゥルツォーと提携(一四九五年)して確保したハンガリア銅を初めとする鉱産物の有力な販路をそこに見出したためにほかならない。⁽²²⁾同家はまさしくこの頃からヴェネツィアに替えてアントウエルペンに主要な販路を切り換えていったのである。⁽²³⁾

統計史料に依れば、フッガーのハンガリア銅は、一五世紀末の四年間に総販売価額の〇・五%がこの都市に送られていたが、翌一五〇一—三年の間ではこれが二四%に、一五〇七—九年の間では四九%に、さらに一六世紀一〇年代前半には六二%にまで比重を高め、販売額においても、一六世紀の初頭から一〇年代初めにかけて三・七倍の伸びを示している。⁽²⁵⁾前項でみたイギリス毛織物の動きとピタリと符節を合わせた推移を示しているのである。

〔ポルトガル香料取引〕 ブリュッヘに南ドイツ商

人の活動が目立っては進ることができないのと対照的に、ポルトガルは一五世紀においてブリュッヘにも出入りしていた。⁽²⁶⁾ポルトガル王室の独占取引において財務官(Bartholomaeus)がブリュッヘからアントウエルペンに移ったのは、一四八八年のマクシミリアンの命令(三)によるのが最初である。⁽²⁸⁾彼は反乱の終息後一時ブリュッヘに戻るが、一四九八年以後アントウエルペンに定着した。翌一四九九年には同市の繁栄を約束したものと多くの史家が強調する香料ステープル設置という出来事があった。⁽²⁹⁾この年アジアから初めて香料が海路で直接にリスボンへと向かった。このアジア産香料(特に胡椒)がアントウエルペンに初めて陸揚げされたのは一五〇一年のことである。⁽³⁰⁾そして一五〇三年以降徐々に香料船の入港数が殖えていった。⁽³¹⁾

〔銅・香料取引の結合〕 前二項から明らかのように、南ドイツ商人もポルトガル王室による香料取引も、十五世紀九〇年代の中頃にはアントウエルペンに活動を定着させ、一六世紀に入るや殆んど同時に、しかも一挙にその活動を全面開花させているのである。この両者の軌を一にした動きは、ファン・ハウテが指摘したよう

に、南ドイツ商人が銅の販路と香料の買い入れをこの地に求め、ポルトガルが香料を売り銅を輸入するという相互関係があったが故に他ならない。⁽³²⁾ 両者の最初の仲介したのは地元商人ニコラウス・ファン・レヒテルヘンであるといわれている。⁽³³⁾ とはいえ南ドイツ商人とポルトガルはやがて地元商人を乗り越えて、同市を舞台として結びついていった。⁽³⁴⁾

ブリュレが通説に対して反論した一点がこのポルトガル香料取引の評価であった。彼は香料取引最盛期のマヌエル一世治下（一四九五—一五二一年）において、アジアからポルトガルにもたらされた香料の九％がアントウエルベンで売られたにすぎないと推計し、⁽³⁵⁾ 従って通説がこの取引にこれまで与えてきた評価は過大なものであったと論じたのである。⁽³⁶⁾

尤も、彼の算定においては、アジアからもたらされた香料について一五〇三—四八年の年平均値をもとにしているのであるから、この推計値にさしたる意義を求めることはできない。わが国ではともかくとして、ヨーロッパ市場においてポルトガルの香料取引の圧倒的な優勢が永くは保持し得ず、早くも一六世紀二〇年代にはヴェネ

ツィアの巻き返しが始まったという認識は、欧米の商業史研究において既に通説といってよい。⁽³⁷⁾ 香料取引は数年単位で大きな消長を示しているのだから、この点からもブリュレの推計値に意味のないことが知られるのである。

また別の史料によれば、一五世紀末まで陸路北上していた香料取引の流れが、まさしく一六世紀初めを境として途絶え、次いでその流れが逆にアントウエルベンを発進地として南下していることが確かめられる。⁽³⁹⁾ また別には、少し年代は下るがリヨンにおいても一五二五年にアントウエルベンから発する香料が二二％のシェアを占めているのであり、⁽⁴⁰⁾ 一五一六年には地中海側のマルセイユに達している以上、⁽⁴¹⁾ 私は一六世紀初めにおけるアントウエルベンでのポルトガル香料取引の意義を軽視することができない。

(1) 毛織物や香料が当時の国際的商品の大宗をなしていた点は断わるまでもあるまい。なお、ファン・ハウテの論文においては、特に銀・銅や香料取引について私が以下示していくようなデータが追跡されている訳ではない。

(2) 越智武臣『近代英国の起源』京都、一九六六年、二章一節。同「ヨーロッパ経済の変動」〔『岩波世界歴史』一四

- 巻「一九六九年所収」。船山栄一「イギリス毛織物工業の構成と海外市場の動向」(高橋他編『近代化の経済的基礎』東京、一九六八年所収)。田中豊治「テューダー後期の外国貿易」『経済志林』四〇巻、一九七二年、等。
- (3) Van der Wee, *op. cit.*, II, pp. 45—47.; J. H. Munro, 'Bruges and the abortive staple in English cloth', *RB*, 44 (1966), p. 1143.
- (4) ステープルについては、桜井清『イギリス・ステープル制度の史的研究』東京、一九七四年、八四—五頁注2。
- (5) マランダルの都市の毛織物工業が危機的狀態に入るのは一五世紀三〇年代からのことである。Munro, *op. cit.*, pp. 1141—1142.
- (6) 一四三四—一六七七年まで断続しつつ実施された。*ibid.*, p. 1141.; *id.*, *Wool, Cloth, and Gold*, Brussel-Toronto, 1972, chapters 4, 6, 7.
- (7) この特権授与後再び禁制が敷かれる(一四四七—一五二一年、一四六四—一六七七年)が、この年の特権は以後のマンロー・ニコ公の特権に規範を与えたものとして評価され、禁制解除後再び同種の特権が同市のマドヴェン・チャラーズに繰り返し与えられたと考えられる。Munro, *Wool*, p. 133.; Schanz, *a. a. O.*, I, S. 9 und II, SS. 162—170. 同公の姿勢が定まらなかつたのは、フランダルの毛織物工業を育成するか、河川通行税収入を重視して輸入禁制を解くかという選択に迷ったためである。一四六七年以後後者が選ばれた。ビレンヌ著大塚久雄他訳『資本主義発達の諸段階』東京、一九五五年、七二—三頁。
- (8) カルル豪胆公は、一四五四年来の銀の対金重量比一・七から一〇・五へ転換した。平価切り下げは彼の収入を4倍した。比は Van der Wee, *op. cit.*, I, p. 127. 4の算定。転換の理由については *ibid.*, II, pp. 80—81.
- (9) *ibid.*, II, pp. 80—83.
- (10) *ibid.*, II, p. 83.
- (11) E. M. Carrus-Wilson and O. Coleman ed., *England's Export Trade 1275-1547*, Oxford 1963. pp. 75—119. 数値より算定した。以下の動静については指摘をこれに4つする。なお年次毎の輸出货量は、船山栄一『イギリスにおける経済構成の転換』東京、一九六七年、一〇二頁以下に載っている。本史料の価値の高ぶる点については、同上書八頁以下参照。
- (12) 六〇年代にマンローは撤退している。W. Stein, 'Die Merchant Adventurers in Utrecht (1464—1467)', *Hansische Geschichtsbücher* 27 (1900).
- (13) Munro, Bruges, pp. 1152—1154.
- (14) *ibid.*, pp. 1154—1155.
- (15) 船山、前掲書、九八頁の表参照。
- (16) 佐藤弘幸「一六世紀のイギリス毛織物工業とマンロー」『一橋論叢』六二巻「一九六九年」。Munro, *Wool*, p. 182—183.; Prims, *op. cit.*, VII—2, 1939, blz. 1—20.

- (17) H. Pohl, 'Köln und Antwerpen um 1500', in Köln, *Das Reich und Europa*, hrsg. von H. Stehlikämper, Köln 1971.; Brulez, 'Les routes commerciales d'Angleterre en Italie au XVII^e siècle', *SOAF*, IV, 1962.
- (18) 一四七九年のハンズ・メヌタの大商人 Ludwig Meuting の動向をめぐって G. F. von Pölnitz, *Jakob Fugger*, Tübingen 1949, II, S. 14.
- (19) フッガー家は皇帝より送られた紋章によって区別して扱われた。ルーカスは大富豪ヤーロフの従兄弟の頭目として「小鹿」の方が勢力があった。Ehrenberg, *a. a. O.*, I, S. 87.
- (20) von Pölnitz, *a. a. O.*, II, S. 14.; id., *Fugger und Hanse*, Tübingen 1953, S. 134.; M. Jansen, *Die Anfänge der Fugger*, Leipzig 1907, S. 38.
- (21) von Pölnitz, *Fugger und Hanse*, SS. 2f.
- (22) 諸田実『ドイツ初期資本主義研究』東京、一九六七年、九七頁以下。
- (23) 同市での取引の可能性が大きくなったためばかりでなく、ヴェネツィアが外国商人の活動を強く規制したためである。Van der Wee, *op. cit.*, II, p. 128.
- (24) *ibid.*, I, pp. 522—523.
- (25) *ibid.*, I, pp. 522—523. ヴェネツィア向は逆に三二%から四%へと急落した。
- (26) Brulez, Brugge, blz. 30—31. 特に銅を求めるためであったが、この市場の銅はフッガー出現以前はまったく南ドイツ産のものが主にはノーレン周辺の鉱山で採掘されたものであった。ノーマン・マンタの記述の地味な結果である。Van der Wee, *op. cit.*, II, p. 126.
- (27) D. F. Lach, *Asia in the making of Europe*, Chicago 1965, I, p. 108.
- (28) Brulez, Brugge, blz. 30.
- (29) Munro, Bruges, p. 1151.; Goris, *op. cit.*, p. 38.
- (30) 往時の一五〇四年説は訂正された。Van der Wee, *op. cit.*, II, p. 127.; H. Van Werveke, *Bruges et Anvers*, Bruxelles 1944, p. 54.; Lach, *op. cit.*, I, p. 107.
- (31) Van der Wee, *op. cit.*, II, p. 127.
- (32) Goris, *op. cit.*, p. 198.; Ehrenberg, *a. a. O.*, I, SS. 237f.; Van der Wee, *op. cit.*, II, p. 128—129.
- (33) Ehrenberg, *a. a. O.*, I, S. 366.
- (34) (32)の文献参照。
- (35) Brulez, blz. 26.
- (36) *ibid.*, blz. 26. ナキスマンはこれを四分の一のシェアと見積った。Lach, *op. cit.*, I, p. 107.
- (37) 栗原福也「十六世紀後半の地中海のヴェネチアン人」『一橋論叢』十二巻、一九七四年、一九頁以下。他はLach, *op. cit.*, I, chap. III.
- (38) Van der Wee, *op. cit.*, II, pp. 124—130. and pp. 153—157.

(39) R. Doehaerd, *Études anversoises. Document sur le commerce international à Anvers 1488-1514*, Paris 1963. I, pp. 194-212. 以下「内陸からの香料は一五〇七年の二件で途絶え、逆に内陸向けの件数は一五〇六年に十、翌年十五件を数える。」

(40) R. Gascon, 'Un siècle du commerce des épices à Lyon', *AESC*, 15 (1966), pp. 664-665.

(41) *ibid.*, p. 646.

三

ところでブリュッヘに本拠を持っていた外国商人のアントウェルペンへの移住を論ずるに際して、初めにその背景となった政治史を略述しておかねばならない。⁽¹⁾

この時期は、ネーデルラントの支配者の交替期であった。すなわち一四七七年にナンシーの戦いでカルル豪胆公 Karel de Stoute が没したあと、女相続人マリアはハプスブルク家のマクシミリアン大公と結婚するが、彼女は二児を残して一四八二年に急逝した。かくてマクシミリアンとフランドル諸都市、ヘント及びブリュッヘとの対立が本格化する。フランドル諸都市は前代カルル以来の重税に苦しんでおり、また大公によるフランスとの

戦争を恐れて、先手を取って女兒マルガレータの嫁資としてエーノーなど一部領土を与えることでルイ一世と通じ、大公を孤立させて一時的に屈服させた(一四八二年のアラスの講和)。

しかし、ルイ一世の死と、ホラントなどの離反によってフランドルは次第に孤立してマクシミリアンが優位に立った。マクシミリアンはあくまで幼少のフィリップスの摂政として臨んだのであるが、フランドルはそれさえ認めようとしなない。こうしてマクシミリアンとフランドル諸都市は二度にわたって戦い、フランドル諸都市は敗れる。またこの間マクシミリアンも軍資金の調達に苦慮し、傭兵が南ネーデルラントの都市や農村の掠奪を繰り返しては民心が離反し、一四八八年にはマクシミリアンがブリュッヘ市内に幽閉されるといふ事態まで現出したのである。

アントウェルペンがマクシミリアンの陣営に組するのは比較的早く、彼が最も苦境にあったルイ一世の死の直前、一四八三年五月のことである。⁽²⁾ この際ブリュッセルなども帰順するが、これらが幽閉事件のとき動揺したのに対し、以後アントウェルペンのハプスブルクに対す

る忠順な姿勢はフェリペ二世の登位する一六世紀後半まで変わることはない。

ともあれ一四八三年後の一〇数年間こそは、先きの二でみた新たな經濟史上の動きと重なりつつ、國際商都アントウェルペン生誕の決定的過程であるといつてよい。三つの支柱に加えて、以下述べるようにブリュッヘに本拠を有していた外来商人がアントウェルペンへの移住を余儀なくされ、やがてはそこに定着してゆくことになる過程であったからである。

開戦当初の一四八三年三月、マクシミリアンはブリュッヘにいる外国商人に対して、フランドルを捨てて、「他のブルゴーニュの州の何処かにその住まいを移す」よう求めた。⁽³⁾ 外国商人もむづかしい立場にあった。その地で結婚している者も多く、債権も地代収入も持つており、準備なく離れば莫大な損害を蒙む。彼らの移住自体、多くは本国の訓令や雇主の指示を仰がねばならなかったからである。⁽⁴⁾ ハンザは当地に留まりたいと回答した。⁽⁵⁾ 次いで六月末大公は再度命令を発したが、今回は本

国にそれを向けた。⁽⁶⁾ そして今度もハンザは全ハンザ諸都市の同意なくしてはブリュッヘへの居住地を放棄しないと答えたのである。⁽⁷⁾

しかし翌一四八五年を迎えて事態は変わつた。一月ハンザは、次のブラバントの大手が終つてもブリュッヘに戻らないこと、つまり彼らがアントウェルペンに定住するともみられる決定を下した。⁽⁸⁾ 二月末にはブリュッヘと北海を結ぶズウインの水路が大公によって閉ざされた。⁽⁹⁾ ジェノヴァ人もヴェネツィア人もこの地を去つた。⁽¹⁰⁾ 六月のブリュッヘへの降伏後、彼ら往時そこを本拠としていた商人は再びブリュッヘに戻つて来たが、この年の末まで水路は閉ざされたままであった。⁽¹¹⁾

その半年後の一四八六年六月マクシミリアンはドイツ国王となって再びネーデルラントに姿を現わした。彼は娘マルガレータの嫁資を取り戻すべく軍をフランスに進めたが失敗を重ねた。再び南ネーデルラントの地はドイツ人傭兵に荒らされ、全土は一四八二年の政治的混乱の状態に戻ってしまった。フランドル諸都市は新たな抵抗を試みることになる。一四八八年一月事態打開のため全国議會を準備するべくブリュッヘに入ったマクシミリア

ンは逆に幽閉されてしまった。彼は讓歩を重ねて息子フリッブスに対する摂政職の中止の要求をも受け入れなければならなかった。彼は五月の半ばになって釈放された。

彼は釈放されるや、先に認めた讓歩を反古にし、次いで三年余の長きにわたるフランドル制圧戦争に乗り出していった。

六月三〇日、マクシミリアンはブリュッヘに留まる全ての外国商人に対し、アントウェルペンに住居と取引の場を移すよう命じた。⁽¹²⁾ またこれとは逆に、彼は次のような勅令を公布した。「ハンザ Oosteringen、ポルトガル人……及びその他ブリュッヘに住まいを持つ……商人によって願ひ出されたるによつて、余は、今時のフランドルでの戦乱、不服従 inobedientien、反抗 rebelligheden あるに鑑み、(以下のことを一引用者注)ここに認む。(即ち一引用者) 仲介料を払い bij manier van provisie、家族と商売 koopmanschappen を携えて余が都市アントウェルペン onze stad van Antwerpen に移住せること、かつ彼らがブリュッヘにて持てる全ゆる特典 al hun privilegien en vrijheden を当地で享受しうるこ

と、またその際には *dat die* プラバント全土を無税にて *vijs* 通交し得ること、⁽¹³⁾ を」。長い戦乱の中で、フランドル人はもとよりとして、凡そフランドルと取引・通交する者までマクシミリアンの逮捕と報復の対象となつた。⁽¹⁴⁾ ブリュッヘは早くも一四八九年一〇月には彼の軍門に下つたが、ブリュッヘの外港スライスの降服は一四九二年十月を俟たねばならず、⁽¹⁵⁾ フランドルの地は荒廢した。この間マクシミリアンは、毛織物仕上工業に不可欠の明ばんのステープルをアントウェルペンに移している。⁽¹⁶⁾ もとより今回もブリュッヘの生命線であるズウィンの流れは閉ざされたままであつた。⁽¹⁷⁾

反乱が終つたあと、かつてここを本拠としていた外国商人は確かにブリュッヘに戻つてきた。⁽¹⁸⁾ しかしその後一四九五年を境としてこの地に南ドイツ商人の姿はみられなくなり、⁽¹⁹⁾ 一四九八年にはスコットランド人がゼーラントに本拠を定め、⁽²⁰⁾ また先述のようにポルトガルもブリュッヘを去つた。そして一四九九年の外国船入港数は、反乱が激化する前年の一四八七年の半分に過ぎなくなつていたのである。⁽²¹⁾ 例外はスペイン人とハンザであつたが、後者は一六世紀に入れば取引の中心をアントウェルペン

に移していったのである。⁽²²⁾ポルトガルの香料船が初めてスヘルデ河を溯航した一五〇一年、ヴェネツィアはブリュッヘンに向かうことをやめ、以後アントウェルペンとサウサンブトンに航行することを決定した。⁽²³⁾

(1) 主に次のものに依った。Pirenne, *op. cit.*, III, pp. 3—56; F. W. N. Hugenholz, 'Crisis en herstel van het Bourgondisch gezag,' *AGN*, IV; A. J. Armstrong, 'The Burgundian Netherlands,' *NCMH*, I, 1957; H. Wiesflecker, *Kaiser Maximilian I. Das Reich, Österreich und Europa an der Wende zur Neuzeit*, Bd. I, München 1971.

(2) 何故この時期に領主側との友好姿勢を打ち出したのか筆者には結論を下す材料がない。ただ、嗣子フィリップスを掌中にして反大公の姿勢を堅持するフランデルが、次第にホラントやブラバントなどから孤立していった状態が指摘できるだけである。尤も「アントウェルペンとブリュッヘン」の経済的対立は一四世紀には早くも顕在化しており、一五世紀以後についてはイギリス毛織物をめぐる利害の対立と見てきた通りである。Armstrong, *op. cit.*, p. 233; Prims, *op. cit.*, VII—1, blz. 39. ヲアンヌ「前掲邦訳」七三頁。なおこの点は研究が進んでいながら「アントウェルペンが都市貴族の門閥支配下にあったこと」他方でフランデル諸都市が毛織物ギルドの牛耳る所であった点

も大に關係してゐた。B. F. Raetfahl, *Wilhelm von Oranien*, I, Halle, 1906, SS. 305—306.

(22) 西平主に次の二つの基礎研究に依る。Munro, *Bruges et Brangers* (XV^e et XVI^e siècle), *Annales de la Société d'Emulation de Bruges*, 88 (1951), p. 31.; *Hanserecesse von 1477—1530*, Bd. I (1477—1485) hrsg. v. D. Schaefer, Leipzig 1881, S. 422.

(23) *Marechal, op. cit.*, p. 30.

(24) *ibid.*, p. 31.

(25) *ibid.*, p. 32.

(26) *ibid.*, p. 32.

(27) *ibid.*, pp. 32—33.

(28) *ibid.*, p. 33. この点も「商人の動向に劣らずブリュッヘン国際商業の死命を制するものである。のちの比較的穏な時期の一四八六—七一年にかけてイタリアとハンザの船が入港してゐた。Munro, *op. cit.*, p. 1148.

(29) *Marechal, op. cit.*, p. 33. このときトランプメントの大市へ赴くと、口実でブリュッヘンを離れてゐる。ヴェネツィアの行動は本国からの指令によるものである。

(30) *ibid.*, p. 34.

(31) Munro, *Bruges*, pp. 1148—1149.

(32) Prims, *op. cit.*, VII—1, blz. 51. 彼はこの勅令がアントウェルペンの発展を約束したと云ふ。

- (14) もとよりどの程度実行されたかは判断できないが、商取引に影響を与えたことは確かである。Doehaerd, *op. cit.*, I, pp. 16—20.
- (15) *Marchal, op. cit.*, p. 37.
- (16) Munro, *Bruges*, p. 1149.
- (17) *Marchal, op. cit.*, p. 37.
- (18) *ibid.*, p. 39; Munro, *Bruges*, p. 1149.
- (19) *Marchal, op. cit.*, p. 42.
- (20) *ibid.*, p. 42. 一五〇八年以後フューレン Veere に定着した。
- (21) スペイン船二四隻を最高に三二隻入港していたのが、この年は総数二二隻に減つてゐる。Van Houtte, VIII, p. 45, n. 2.
- (22) Ph. Dollinger, transl. by D. S. Ault and S. H. Steinberg, *The German Hansa*, London 1970, p. 315.
- (23) Munro, *Bruges*, p. 1155. なおこのころフアン・ハウテのこの反乱に対する評価をみておきたい。彼は反乱期のマクシミリアンの命令がブリュッヘンやアントウェルペンの運命を左右したとは考えてゐない。V. *blz.* 158—159. といえ彼は一四九五年前後にこの両市の間に変化が生じたことを認めているのである。それでいながらその変化の所以が説かれていない。

結 び

以上、外来商人がいかにしてアントウェルペンへ定住していったか、この点に絞って考察してきた。そしてこの過程が、第一には新らしい国際経済の台頭によるものであったこと、第二には政治的情勢に深く影響されていたことをみえてきた。政治的動乱によってブリュッヘの商人はアントウェルペンに赴むかざるをえなくなり、同市はこれをきっかけとして以後繁栄期を通じてハプスブルク家との密接な関係をつくりあげてゆく。ハプスブルク家はアントウェルペンに定着する金融資本家を必要としたのである。

その際、アントウェルペンは外来商人に対して相互取引の場(大市)を提供し、地元民の活動は主に繁栄の分け前に与ることに徹しており、決して最前面に現われることはなかった。つまり同市はまさしく大市としてその繁栄を享受したといえる。大市というのは商人が自己の商品を持参して取引する市場であるから、アントウェルペンの繁栄は時の国際政治や経済の動きに応じて大きく左右されたのであり、またされざるをえなかった。その

意味でこの都市の商業都市としての性格は、外国商人相互の取引を厳禁してあくまで主導権を保持した商業国家ヴェネツィアとも、毛織物工業を背景に持つブリュッヘや一七世紀のアムステルダム(レイデン毛織物工業)、さらにはロンドンとも異なる。大消費都市という観点からしても、往時のコンスタンチノーブルに遙かに及ばないのである。

同市内部の工業として重視すべきは、イギリス毛織物工業と相互依存関係にあった仕上工業である。しかしこれとても、同市を独自の販売地たらしめるといよりは、むしろケルンを核とする内陸市場と歴史的に結びついており、それによって深くその存在が規定されていたといえる。

このように、アントウェルペンの繁栄は、大きく外部からの力によって生みだされたものであったと考えられるのである。

今後の検討に俟たねばならぬ点が多々あるとはいえ、私はこの小論において、ファン・ハウテらによって国際的な経済史との関連でつとに研究されてきたアントウェルペンの繁栄の歴史的な性格を、この点についてもその後の成果を踏まえつつ、さらには一歩進めて同市のハブスブルク家との癒着が一五世紀末のフランドルの反乱の只中で形成されていったものであることを指摘することによって、浮き彫りにした。かかる経緯を無視しては、アントウェルペンが一举に国際商都へと駆け上がったといった所以は理解できない。

本稿は筆者が日本西洋史学会第二十五回大会(於同志社大)・近代史部会で一九七五年五月に発表したものである。発表に際して越智武臣氏から、論文作成に当って栗原福也氏からそれぞれ貴重なコメントをいただいた。記して謝意を表する次第です。

(一橋大学大学院博士課程)